

録音教材

平田 泉

この教科書の音声テープは 東京語のアクセント・イントネーションを基本とし、20代前半から40代後半の7名（男性2名、女性5名）の声で作成されている。テープには GETTING STARTEDに続いて、第1課から第30課のLISTENING AND SPEAKING からフォーメーションとドリルが入っている。

GETTING STARTEDでは五十音図と日常生活に役に立つ表現を学びながら、日本語の音に馴染み、発音練習ができる。第1課に進む前に、ここで十分発音やイントネーション、アクセントなどの基礎練習をしておく。フォーメーションでは、示された語彙・文のアクセント、イントネーションの個々のケースを、その都度聞き取り、模倣して、身につける。

フォーメーションではそれぞれの学習項目が、例を使ってキューと作られるべき語／句／文（これは教科書のフォーメーションの部分には書かれていない）で提示され、続いて置き換え練習ができるようになっている。質問に対する答え方を練習する場合は、必ず対話の形で練習できるようにした。つまり、必ず、問いが与えられるので、それに答える形で答の文を発話できる。また、自然な発話とするために、教科書で（ ）で括られている要素は基本的に省略するものとする。

例) 第1課 フォーメーション 4-1、This, that, and that over there

- 1 キュー1) : [テープの声で] - 「1。 あれ、寮」
- 2 (学習者が与えられたキューから作られるべき文-ここでは「あれは何ですか。」という質問文-を発話するためポーズ)
- 3 模範解答提示 : [テープの声で] - 「あれは何ですか。」
- 4 (学習者が模範解答を確認し、その修得を強化する目的で繰り返すためのポーズ)
- 5 キュー2) : [テープの声で] - 「あれは何ですか。」 - 作った質問文に対する答えを発話するためのキュー
- 6 (学習者が質問に対する答の文を発話するためのポーズ)
- 7 模範解答提示 : [テープの声で] - 「寮です。」
- 8 (学習者が模範解答を確認し、その修得を強化する目的で繰り返すためのポーズ)

――以上8つのステップを踏む――

教科書のフォーメーションの部分には作られるべき語／句／文が書かれていないが、テープには入っている。従って、テープを使つての予習（自主練習）では、まずキューを使つて自分で言ってみてから、テープの答を聞き、正確にできたかどうかチェックするといい。一方、復習（自主練習）では、テープの声を置き換え練習の主導者として、与えられたポー

ズの間に、できるだけ正確なアクセント、イントネーションでスムーズにその語／句／文が発話できるようになるまで、練習を繰り返す。

ドリルの置き換え部分はキューの箱の中から適切なものを選んで行うが、いくつかの組み合わせが可能で答は1つとは限らない。そのため、テープにはモデルとして教科書に提示されている短い対話のみが入っている。ドリルは短い対話のモデルであるとともに対話の最小の単位をも示すもので、できる限り自然であることを目指した。ドリルの短い対話がモデルであるのは次の3点からである。

- 1) 使い方のモデル（文の機能の例証）
- 2) アクセント、イントネーション、発音のモデル（音声面でのモデル）
- 3) 対話故の要素（相手の発話の受け方、話者の心の状態－モダリティ、修辭的表現、待遇表現など）のモデル

「できる限り自然に」という姿勢は次の点にも反映している。すなわち、GETTING STARTED、第1課など、vol. 1のはじめの部分は初めて日本語に接する段階であることをやや意識して録音したが、以後の課は敢えて調音をより明確に行ったり、発話のスピードを遅くしたりはしてない。

以上のように、音声テープは「使える日本語」を身につけることを目的とするこの教科書を補完し、その目的達成を助ける大きな役割を負っている。この教科書での学習に、教室内及び教室外での積極的な音声テープの使用を勧める所以である。